
月の魔術師が行く！お正月特別企画

気まぐれな黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の魔術師が行く！お正月特別企画

【Nコード】

N2378J

【作者名】

気まぐれな黒猫

【あらすじ】

お正月を迎えた潤夜たちが新年会を催したようです。

お正月、それは新しい年の始まりである。

「つと、言うことで」

『新年、明けましておめでとうございます!』

とある宴会場に馬鹿でかいこたつが用意されており、その上におせち料理がずらつとならんでいる光景は見た者を圧倒する。

「読者の皆さん、明けましておめでとうございます。当物語の主人公、月城潤夜です」

いつも通り、Ｔシャツ、ジーパン姿で頭を下げる少女の潤夜。

「おい親友、お前はなぜ私服なんだ？」

「そうよ下僕、せつかくのお正月なのよ!」

それぞれ袴はかまと振袖ふりそでを着た藤崎賢渡ふじさきけんとと九重雫ここのえしずくが潤夜の後ろからガッシリと肩を掴む。

「いや、ほら、あれだ。俺はそういった物持っていないし」

「抜かりない、童がしっかりと買っておいたぞい」

十二単を着たツクヨミがちっちゃい度ピンクの振袖を持っていた。

「なんて余計なことを！！　つかそれより、よく十二単なんか着たなお前」

「実は童、こういった催しは大好きなのじゃ」

「あら、奇遇ですねえ」

ツクヨミに同意した月の女神は、なぜかこたつから顔だけをだして寝転んでいた。

「お前は何をやっている」

「・・・私は寒いのが苦手なのです」

確かに女神の格好は冬に寒いだろう。

しかし、だからといってこたつにもぐるなど、潤夜が叫ぼうとすると

「まあまあ、そう固いこと言うでない、せつかくの宴の席だ楽しもうではないか」

「そうですよウルヤ様、水を差すようなこと言わないでいただけませんか」

リオ王子とティア姫が赤い顔をしていた。

「ちょっとまで、王子はともかくティア王女は未成年だろ！？」

「異世界の法律はわたくしには関係ありませんわ」

そう言ってコップに注がれた透明な液体を一気に飲み干した。

「誰だよお酒なんて持ち込んだの!!」

キョロキョロと辺りを見まわすと、一升瓶を片手にはしゃぐアシュリーの姿が目についた。

「おまえかあああああ!」

「きゃははー」

颯爽と逃げ出すアシュリーを追いかけてようとすが、肩を掴まれたままに動くに動けない。

「それじゃあ行きましょうか」

「そうじゃのう」

すくつと立ち上がったツクヨミと雫からなにやらオーラが漂ってくる。

「い、行くてどこに・・・?」

「もちろん」

「着せ替えにじゃな」

笑顔が怖い二人に引きづられて……………

「い、いやだあああ!」

悲痛な叫びを残して潤夜は会場から姿を消した。

「おわったぞい」

しばらくして戻ってきたツクヨミは満足そうな顔をしており、雫もニコニコと笑顔が絶えない。

「ちょっと下僕^{あにき}、はやく出てきなさいよ！」

雫が扉のところに隠れる潤夜を無理やり部屋の中に引っ張り込む。すると、周囲から『おお！』という感嘆の声が上がった。

「元がいいからのう」

と、ツクヨミが言う。

「うう・・・は、はずかしい・・・」

顔を赤らめてもじもじする潤夜はぶっちゃけ反則だ。可愛さがはんぱじゃない。

「くっ・・・下僕^{あにき}の癖に・・・」

「親友^{やめいじ}、過ちを犯したらすまない・・・」

「えへへ、マーニかわいい」

ふらふらと雫と賢渡が前方から迫ってくる。

そして、後ろから抱き付いてきたアシュリーは

「酒臭！」

ベロンベロンに酔っていた。

身動きが取れない状態で目の前からは悪魔が二匹、正直冷や汗が止まらない。

「そ、そうだ！ 魔王のやつはどうしたんだ？」

苦し紛れに姿の見えない招待客がどうしたかを聞く。

「ふむ、そういえば来ておらんな。どれ、連絡を取ってみよう」

王子がどこからともなく取り出した電話を掛ける。

『なんだ！ この忙しいときに！！』

数回のコールの後、イラついた魔王の声が聞こえてきた。

「顔が見えないのは不便ですねえ、えいっ！」

女神が指をパチンと鳴らすと何もない空間に突如、魔王とその周辺の映像が映し出された。

「神の力をこんなことに使っているのでしょうか・・・」

割と常識人なティア姫が恐々としていた。

『……貴様らはそんな格好で何をしている』

「なにつて新年会だけど？」

魔王が執務机に座った状態で電話を耳に当てている。
つつか、魔王城によく電話なんて物があつたな。

「私が置いておきました♪」

とりあえず余計なことをありがとう女神。

「とりあえず魔王！ お前招待状送つたのに何でこないんだよ！」

『愚か者めが！ 仮にも王族がそのようなことに現を抜かして
は国の政が滞るではないか！ 民が快く新年を迎えるのにやらねば
ならぬことは山ほど有るのだ！』

目の下に隈をつくつた魔王が電話越しに怒鳴る。

こいつ、マジなんで魔王なんてやってんだろぅ……。..
下手な貴族や王族よりも立派な考えをおもちな魔王に感心する俺を
差し置いて酔いに酔いまくつたアシユリーが魔王に絡む。

「なんだよマオー、あたしの酒が飲めないって言うのかよぉ」

『む、その酔っ払いは。国（ネタバレのため足からず）の第二王
女ではないか、執務をこなさずにそのようなところで遊びほうけて
いるとは嘆かわしい』

「業務とか執務なんて家臣に押し付ければよかるっ？」

シユリーを押しつけた王子が再び電話をとる。

『ふ、一人で全てをこなせぬ様では魔王などやってはられぬわ!』

「要するに執務をこなせる家臣が居ないということですね?」

ティア姫が容赦ない一言を魔王に放つ。

『ええい! うるさい、うるさい! 我は忙しいのだ! 下らぬ事でいちいち仕事の邪魔をするでないわあ!』

そう言つて魔王は電話を切った。

「流石魔王だよな、空気読まねーし」

「そうじゃな」

賢渡とツクヨミがうんうんと頷き合つてゐるが俺はどう考えても魔王の言い分が正しい気がするのだが?

「そんなことより飲も〜ぜ〜!」

酔つて性質の悪くなつてゐるアシユリーが酒瓶を無理やり女神に飲ませる。

「あー! ちょー! やめろ! お前ら、自分らだけ楽しんでないであいつ止めるの手伝え!」

飲まれた女神はその場で寢息を立て始め、賢渡と雫とツクヨミは三人で話して花を咲かせ、王子とティア姫は二人で飲み明かしてゐる。

キャハハーと走り回るアシュリーにそれを止めようと追いかける潤夜とだいぶ混沌とした会場になってしまっていた。

『ふむ、あやつらが使い物にならなくなっているから我が締めて進ぜよう』

『これから月の魔術師が行く！　を楽しみに待っているがよい！
それではな』

ええい、なぜ我がこのようなことを……………プツン

（後書き）

この話は本編とはまったく関係ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2378j/>

月の魔術師が行く！お正月特別企画

2010年10月10日06時48分発行